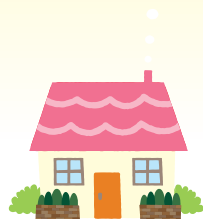


震災子ども支援室は、ある個人の年1200万円の寄附を原資とし、
その他多くの方々の寄附を頂いて活動しています。



このパンフレットは環境に配慮した
「水なし印刷」により印刷しております。



環境にやさしい植物油インキ
「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。

この子を育てて

～東日本大震災後の親族里親の声から～



東北大学大学院教育学研究科
震災子ども支援室
“S-チル”

はじめに

2011年3月11日の東日本大震災により両親を亡くした子どもたち(いわゆる震災孤児)は被災3県で253人にのぼります(自治体調べ)。そうした子どもたちのほとんどは、親族である祖父母やおじ、おばに引き取られました。東北大学大学院震災子ども支援室(S-チル)は、震災後、宮城県なごみの会および宮城県内の各児童相談所とともに、県内各地で定期的に親族里親サロンを開催し、親族里親さん同士の語らいの場として頂きました。

突然に保護者となった親族里親の方々は、やり場のない感情を抱きながら、日々成長していく子どもたちを育ててこられました。そのような思いについて、2013年、震災子ども支援室は、親族里親14家族から聞き取りを行い、『この子を育てる』という小冊子にまとめさせていただきました(2014年発行)。

震災から時間が経つにつれて、里親の措置解除を迎える方や、その時期が近づいてくる方もいらっしゃると思います。そこで震災後7年を過ぎた2018年、震災子ども支援室は、里親のご様子やこれまでの子育ての振り返りなどをお聞きするアンケートとインタビュー調査を行い、「里親の声—あのかからこれまで、そしてこれから(震災里親家庭及び養育に関する調査報告書, 2019)」にまとめました。本冊子『この子を育てて』は、その要約版*です。前回の『この子を育てる』と同様、手に取りやすく、読みやすい小冊子の形にいたしました。里親に関する制度についても簡単な紹介を加えましたので、より多くの方々が里親をめぐる状況に関心を寄せるきっかけとしていただければ幸いです。

今回の『この子を育てて』では、子どもたちの成長がたくさん語られることとなりました。子どもたちは、成長に伴って手がかからなくなる部分もありますが、思春期や反抗期、学習や進路など、新しい課題も生じてきます。里親たちは、子どものことを気遣い、自立や将来を案じ、迷ったり困ったりします。しかしその一方で、日常の何気ない出来事を喜び、子どもの成長を感じ、故人に報告し、子どもたちに弔いの形を伝えていました。日々の子育ての積み重ねを、“大変だけれど、生活の張り”、“支え”、あるいは、“私の人生はこれなんだな”と語っています。たくさんの方々に伝えたい言葉の数々がここにあります。

アンケートとインタビューを快くお引き受け下さった里親の皆さまに、心より感謝申し上げます。里親さんのご健康とお子さんの健やかな成長をお祈りいたします。

東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室
室長 加藤 道代

*『この子を育てて』作成にあたり、インタビュー結果にアンケート調査の自由回答も含めて、17家庭(非親族の養育里親1家庭含む)からの声を再分類し、新たなラベルに変更しました。調査は、東北大学大学院教育学研究科研究倫理委員会より承認を得て実施されました。

目次

●里親制度(養育する人)について p.3

●後見人制度(財産を管理する人)について p.4

1. 里親になったとき

p.5

- 当然のこと
- 配偶者への配慮
- 喪失感

2. 一緒に暮らす中で

p.7

- 戸惑い
- 子どものことを気遣う
- 親として
- 親ではない
- 子どもの成長・変化
- 成長に向き合う
- 喜び
- 苦しさ
- 育てられなくなる不安
- 迷い
- 故人への思慕
- 故人との対話

3. これまでとこれから

p.18

- 里子の存在の大きさ
- この子を育ててきたこと
- 今後のこと

里親制度について (養育する人)

里親制度は、さまざまな事情で家族と暮らせない子どもを家庭で養育する社会的制度です。子どもたちは18歳になるまで(必要であれば20歳まで)里親制度を利用することができます。東日本大震災で孤児となった子どもたちの多くは、祖父母やおじ・おばなどの親族に引き取られました。里親制度を利用すると子どもが生活するのに必要な経費が支給されます。一方で、表1に示すように里親制度において祖父母などは親族里親、おじ・おばなどは養育里親に分類されることから、おじ・おばには養育里親として里親手当が支給される一方で、祖父母は親族里親として里親手当が支給されません。

表1 里親分類と東日本大震災における適用

里親の分類	内 容	東日本大震災での例	必要経費	里親手当
養育里親	家族と暮らせない子どもを一定期間、自分の家庭に迎え入れて養育する里親(研修受講必要)	大おじ・大おば おじ・おば	あり	あり
親族里親	子どもの扶養義務者及びその配偶者である親族で、子どもの養育をする里親	祖父母など	あり	なし

後見人制度について (財産を管理する人)

未成年後見人は、未成年者の契約を代わりに行ったり、財産管理をしたりします。東日本大震災で孤児となった未成年が親の死亡保険金などを受け取るためには、「未成年後見人」をつける必要がありました。東日本大震災では、多くの場合、親族で里親になられた方が自分を未成年後見人として裁判所に申し立てし、選任されたようです。そのため「里親」兼「未成年後見人」となり、子どもの財産の管理をし、定期的に裁判所に報告書を提出しなければならなくなりました。

また1人目の後見人は申し立てを受けて選任されますが、2人目以降の後見人は、裁判所の権限でつけることができます。これら里子の財産管理に関わる弁護士や司法書士、税理士などの専門職後見人、後見監督人、後見制度支援信託銀行への報酬は、里子の財産から支払われます。

震災子ども支援室“S-チル”報告書
「未成年後見人制度・里親制度について」より

1 里親に なったとき

里親の方々は、自分が子どもたちを引き取るのは当然という強い思いで子どもたちを預かりました。一方で、里子と血縁関係のない配偶者を気にかけ、また親族を亡くしたことで大きな喪失感も抱えていました。

当然のこと

「私が守らなくちゃ誰が守る」と思っていた。

普通に考えて私は全然違和感もない、悩んだりしなかった。

私たちが手放すってことは全然考えてなかった。

配偶者への配慮

私にしてみればこころの孫だからいいけど、(里子と血縁関係のない)夫にすれば、葛藤はないけど、やっぱり何かあって当然ですよ。

(里子と血縁関係のない)夫がどう思ってるんだろうって気になるときもあったり。

喪失感

私は当時、孫うんぬんよりも娘がいなくなったことで手一杯なんです。私には、とにかく朝きた、夜きた、ただそれだけ。今思うに、あの頃はたぶん、完璧な私は半分以上死んでいたと思っています。

② 一緒に 暮らす中で

そもそも子育て自体が初めてという場合も含め、これまで一緒に暮らしていなかった里子との生活に、多くの里親は戸惑いを感じました。しかし同時に、里親たちは子どもたちの抱えている大きな喪失を常に気にかけていました。また、親（養育者）としての役割を果たさなければならぬという気持ちと、親ではないという気持ちとともに抱いていました。子どもが成長すると、手がかからなくなる一方で新しい課題も生じてきます。そうした子育ての日々には、喜びや苦しさ、育てられなくなる不安、迷いなど、さまざまな思いがありました。故人への思慕を感じ、時には、子どもの成長を故人に報告し、故人とともに子どもを見守ってきました。

戸惑い

私自身、子育てをしてないので、子どもの視点が全然分かってなかったですね。

生活環境が違う。勉強に対する考え方の違いがある。

私は娘しか育てていないので、男の子は、育て方がまったく違う。難しいです。

震災前の環境や育てられ方と、私たちの育て方が違い、接し方が難しかった。

自分も子どもたちも、慣れるまでが大変だったと思う。生活サイクルも含め、いろんな日常生活のルールっていうか、逐一すべてが変わったわけだから。

子どものことを気遣う

私にはそんなに甘えたりしなかった。最初の頃はね。

子どもの気持ちが分かるから、私はどうしてもきっちりダメだって言えない。

親が亡くなったというのがあるから。頭から、かわいそうだと。そういうことがある。

みんな「お母さんお母さん」っていうでしょ。それが言えないんだもん。お母さんって言えないのは一番かわいそうだなって思ってる。

子どもも泣きたかったってことに気づいたの。ごめん。あんたがいるのにごめん。自分のことしか今考えてなかった。それからは私は泣かないけどね。

母親がいなくなっても一切泣いたり、騒いだりしなかった。いつか抑えられなくなって、バンッと来るかと思って心配で、ずっと頭にあった。

子どもが「母親はいつも近くにいるって思ってるから、寂しくもないし会いたいと思わない」って。ああ、なるほど、いつも近くにいるっていう感覚があの子の中にあったから、寂しくないんだと。

子どもからショックなことを言われた。でもそれを問い詰めてもしょうがない。親もいないから、私にしか当たれないんだよ、子どもは。他に当たることもできないだろうから、手を広げて抱えるしかないんだ。



親として



悪いところは怒らなきゃいけないでしょ。だから私も何回か怒ったんだよ。はじめは。

孫であり、親代わりになるのは大変な面もあります。

自分の子どものように喧嘩したり、涙を流したり、買い物にいったりしている。



親ではない



いくら頑張っても父親、母親にはなれない。

結局彼の中では、私はあくまでおばちゃんなので。私も育ててはいるけど、自分の子だったらこうなのになって、一つ置いてるっていうか。祖父母的な接し方みたいな感じ？ 直接の親っていうよりはね。

親だったら、こうしろこうだとか言えるんだけど、祖父母だからどこまで言ってもいいんだかわかんないのよね。

子どもを育てるのと孫を育てるのはちがう。

本当は(厳しくしても祖母として)手取り足取りしてあげたいんだよ。

子どもの成長・変化

小学校の時の手がかかったのが嘘のように、中学生だと自分一人ができる。

帰省の際に、「今度は自分で来るから」って、「迎えに来なくていいから」って。私たちの年齢を気遣って。

当時は、高校生と大学生であり細かいことは言わないようにしていた。今はさらに大人になり、大事なことを言う程度。

当初は、小さかったもので、何が何だかわからず、うちに来たけど、今は中学生になっていろいろ考えていると思う。「本当の親ではないから」という思いを抱いてきている。

結構気を遣ってたところもあったみたいで、「おばちゃんもこれから言いたいことを言う」と話したことがあって。「じゃあ僕もそうする」って。

ともに生活して様々なことを共有することによって、より絆が深くなった。

今年になって3.11が近くなり、テレビ等で震災の放送が一日中ある日が何日かあった時、嫌だとはじめて口にしました。

子どもたちが高校や大学、専門学校を卒業し、社会人となることを見れて安心した。

成長に向き合う

反抗期大きいですよ。おじいさんには特に。もう少したてばずっと違うと思うけど、いま一番(大変)だね。

反抗期、私にむかってくるとは元気なのかと思いますが、つらいです。

思春期を迎えて、子どももどんどん難しくなってくる気がして、どうしたものかと思うことはあります。

ふざけたり、反抗だったりはありましたが、その年齢の成長過程の特徴と思って接していました。

今はまだ勉強を教えられる。もっと学年が上がったらできない。

授業参観とかに行っても、年寄りだから恥ずかしいよね。階段あがるのも大変。

学校生活で一番嫌なのは参観日。

成長と共に将来のことを考えなくてはならないこと。自立の道を作ってやらなければならないと思うこと。

子どもたちの目標に進ませてやりたいです。応援してやりたいと思う。

学習習慣が身についておらず、進学できるかどうか心配したが、何とか高校3年生までになることができて、今は就職先のことが心配。

命日がくると線香をあげたり、母の日がくると小遣いで花を買ってあげないとって教えないとね。分からないから。何か特別な食べ物があるときは、仏壇にあげて、家族で何かするときは、お母さんのことも忘れないように言っている。

子どもの意見を尊重した。毎日が大変ですが、日々頑張っています。



たまに子どもが料理をしてくれる。

子どもが学校行事や部活などで表彰されたとき。

(震災後3年目に)子どもたちから、私の誕生日に手紙をもらった。引き取ってくれてありがとうとあり、涙が出るほど嬉しかった。

ふだんの何気ない一言、ふつうに過ごしていることが嬉しい。ご飯を美味しいと食べてくれたり、家族で出かけたり成長している姿も嬉しい。

素直に成長してくれたので本当に良かった。

手がかからなくなり、本当に楽になりました。私にしてみればそれが唯一の嬉しいことです。

苦しさ

元居たところに帰りたいと子どもに言われるのがつらかった。

娘がこの家の本当の子どもではないことを悩んだり、気にしたりしなければいいなと思う。実子と同じように扱っても悪いことなどして叱ると「私ばかり・・・」とか、「本当の親でないからわかってくれない」と言われるとつらく悲しい。

育でられなくなる不安

子どもが世の中のことをちゃんと考えて生活していけるまで私が元気でいられるかなって思い、その不安はありました。

子ども達が20歳になるまで頑張ろうと思ってそれだけです。

迷い

いつも「うちにきて、子どもたちは幸せだったのだろうか」と考えています。きっと答えはすぐにでないでしょう。子ども達が大人になった時、幸せだったと思ってもらえたらなあ。

私は引き取って当たり前と思っていますが、本当にこれでよかったのか、育て方が間違っていないかとか毎日のように不安になります。

故人への思慕

娘（故人）のために子育てしている。娘が亡くなったのが悔しいから。

娘が亡くなったっていうショック。あの辛さ、悲しさがあったら、何にでも耐えられるわ。

私は、(里子を)娘の生き代わりだと思って、育ててきましたよ。

子どもたちをどう育てて良いか分からず。でも亡くなった娘のことを考えると、夫婦で子どもたちを育てていかなければならないので、がんばるしかないのかな。

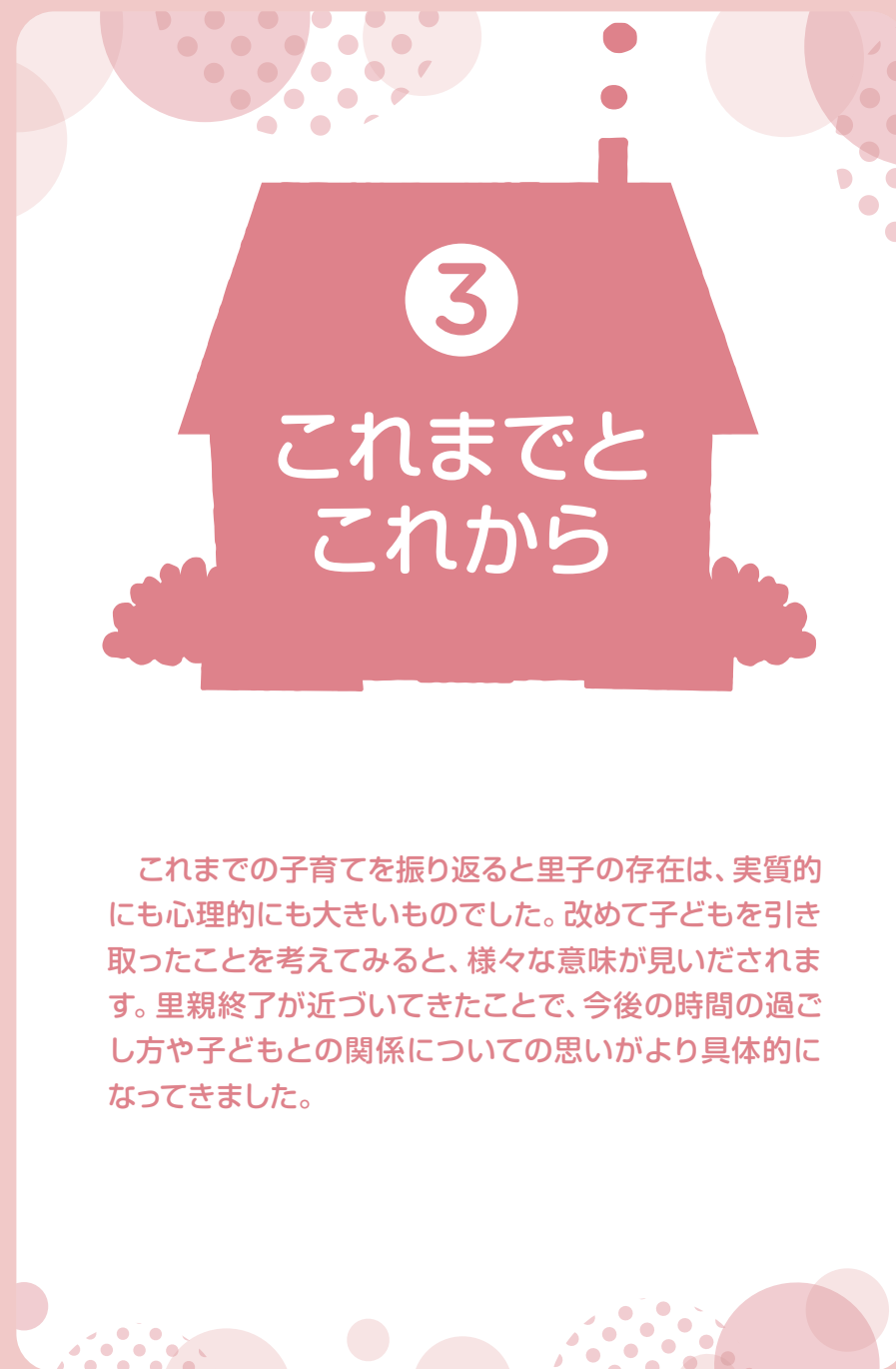
入学式とか卒業式とかには、亡くなった娘を思い出して涙が流れます。成長を見せてやりたいと思う。

娘を失ったことが残念だ。

故人との対話

子どもが「おばあさん、お母さんの好きな花、何だっけ？」と聞いてきて、好きな花を仏壇に飾りました。

仏壇に向かって、「こういうふうに言われたんだよ」って「こんなに大きくなったよ」って言ってるの。



これまでの子育てを振り返ると里子の存在は、実質的にも心理的にも大きいものでした。改めて子どもを引き取ったことを考えてみると、様々な意味が見いだされます。里親終了が近づいてきたことで、今後の時間の過ごし方や子どもとの関係についての思いがより具体的になってきました。

里子の存在の大きさ

毎日が戦争。大変だけど、生活の張り。

苦労と思ってもしょうがないから、やっぱり泣く暇なかった。涙流す暇がなかった。

あの子がいたから、仕事も頑張れるし、震災後のいろいろやっていかなきゃいけないことがスムーズにできた。

里子と同じ感覚(悲しみ)を共有している。仕事も頑張れる。支えになっている。

この子を育てできたこと

子育てっていうのは、できるっていうことを、ありがたいって思うっていうかね。大変なこといっぱいありますけど。

可愛いし、大変だし、楽しみだし、心配だし、なるようにしかならないのかね。

何でこうなっちゃったんだろう。最終的には仕方のないことっていうか、そういう運命なんだろう。

離れるまではお互いに面倒みなきゃいけないんだなあって。私の人生はこれなんだなって。

私の苦手分野を全部突きつけられている感じですよ。早起きして、きちんとした当たり前の生活をするのが、とっても苦手だった。あと地域の人たちとつながりがないと、子育てってやっぱりできないんですよ。ただ、そうやっていく中で、いろんな人との出会いがあって、本当に助けられたなとも思いますね。

大変なときでも、故人たちは私が育てるってことを望んでるなっていうことだけが私の最後の心の支え。

里親制度が終盤に近づいてるので安心感みたいなの、ひとつ満足感みたいなのもある。いろんなことはあったけれども、なんとかやりきったかなっていうような気持ちですね。

子どもたちに対して自分が役に立ったかどうかは分からないが、おじとして最低の仕事はしてやれたかなと思う。

一緒に生活し始めたときは、10年間も育てることができるかと不安をもっていたが、なんとか皆様のご協力でここまで来て、育てて良かったと考えている。

今後のこと

ちょっと今は余裕ができたので、子育てが終わった先のことを。自分の時間を持てるように。今はそれを支えにしています。

子どもはもう高校生になったから、自分は自分の楽しみを見つける。

みんなに支援していただいて貯蓄してきたお金を騙されないといいなと思います。

基本的には、里親が終わっても一緒に暮らすつもりでいます。ただ子どもが好きなように。特に子どもにすぎりつくようなことはしない(笑)。

本当の気持ちは子どもに来てもらえたら(一緒に住んでもらえたら)いいなって思う。

後継者だから。跡を継いでもらわないといけないから(笑)。

調査に御協力下さいました皆様に心より感謝申し上げます。



「この子を育てて」

[編集者] 加藤 道代 東北大学大学院教育学研究科 教授
震災子ども支援室 室長
一條 玲香 震災子ども支援室 研究員
平井 美弥 震災子ども支援室 主任相談員
押野 晶子 震災子ども支援室 相談員
大堀 和子 震災子ども支援室 相談員
嶺岸 真琴 震災子ども支援室 事務員

[発行日] 2019年10月1日

[発行者] 東北大学大学院教育学研究科 震災子ども支援室

[代表者] 加藤 道代

住所 仙台市青葉区川内27-1
Tel/Fax 022-795-3263
E-mail s.children@sed.tohoku.ac.jp